



対がん協会報

1部70円(税抜き)

第652号

2017年(平成29年)
8月1日(毎月1日発行)

公益財団法人 日本対がん協会 「日本対がん協会」と「対がん協会」は登録商標です
〒100-0006 東京都千代田区有楽町2-5-1 有楽町センタービル(マリオン)13F
☎(03) 5218-4771 <http://www.jcancer.jp/>

主な内容

- 2面 膵臓がん早期発見の臨床研究スタート
- 4、5面 特集がん教育
- 8面 リリー・オンコロジー・オン・キャンパス

がん征圧全国大会 9月8日に金沢市で開催 「“いしかわ”から発診 がん征圧で かがやきの未来へ」

主なプログラム

【全国大会前日行事】

9月7日(木) 金沢東急ホテル

■実務者研修会 12:00～13:30

テーマ:「高濃度乳房について」

講師: 笠原善郎・福井県済生会病院外科部長

■支部長会議 14:00～15:00

朝日がん大賞受賞者の講演

■シンポジウム 15:10～17:30

テーマ:「胃がん検診～近未来のあるべき姿」

シンポジスト:

越田理恵・金沢市保健局長 / 井上真奈美・国立がん研究センター 社会と健康研究センター部長 / 加藤勝章・宮城県対がん協会 がん検診センター副所長 / 厚生労働省健康局 がん・疾病対策担当者

【がん征圧全国大会】

9月8日(金) 10:00～12:15 本多の森ホール

■表彰 朝日がん大賞、日本対がん協会賞(個人・団体)、永年勤続者、がん征圧スローガン最優秀賞

■記念講演 アグネス・チャンさん(歌手 / 日本対がん協会 ほほえみ大使)

■次期開催県挨拶 公益財団法人ちば県民保健予防財団

■主催 公益財団法人日本対がん協会、
公益財団法人石川県成人病予防センター

■特別後援 朝日新聞社

■後援 厚生労働省、文部科学省、日本医師会、石川県、金沢市、石川県医師会、石川県看護協会、石川県婦人団体協議会、金沢市校下婦人会連絡協議会、北國新聞社、テレビ金沢、北陸朝日放送

日本対がん協会と石川県成人病予防センター(日本対がん協会石川県支部)は、がん征圧月間の9月8日に金沢市で「がん征圧全国大会」を開催する。今回で50回目。金沢市での開催は22年ぶり2回目。今年の大会テーマは「“いしかわ”から発診 がん征圧で かがやきの未来へ」。

全国大会当日は日本対がん協会のほほえみ大使で歌手のアグネス・チャンさんが記念講演を行うほか、朝日がん大賞や日本対がん協会賞に選ばれた個人や団体の表彰、日本対がん協会グループ支部・提携団体の永年勤続者や、がん征圧スローガン最優秀賞を表彰する。

本大会前日の実務者研修では、現在話題になっている「高濃度乳房について」と題して、笠原善郎・福井県済生会病院外科部長が講演する。

また、シンポジウムでは「胃がん検診の現在～近未来のあるべき姿」と題して、地域でのがん検診の状況、国のがん対策、将来の胃がん検診の姿について、白熱した議論が交わされる予定だ。シンポジストは越田理恵・金沢市保健局長、井上真奈美・国立がん研究センター 社会と健康研究センター部長、加藤勝章・宮城県対がん協会 がん検診センター副所長ほかを予定。

がん相談ホットライン 祝日を除く毎日
03-3562-7830

日本対がん協会は、がんに関する不安、日々の生活での悩みなどの相談(無料、電話代は別)に、看護師や社会福祉士が電話で応じる「がん相談ホットライン」(☎03-3562-7830)を開設しています。祝日を除いて毎日午前10時から午後6時まで受け付けています。相談時間は1人20分まで。予約は不要です。

医師による面接・電話相談(要予約)
予約専用 03-3562-8015

日本対がん協会は、専門医による面接相談および電話相談(ともに無料)を受け付けています。いずれも予約制で、予約・問い合わせは月曜から金曜の午前10時から午後5時までに☎03-3562-8015へ。相談の時間は電話が1人20分、面接は1人30分(診療ではありません)。詳しくはホームページ(<http://www.jcancer.jp/>)をご覧ください。

膵臓がんの早期発見目指して臨床研究 枕崎市・出水市で開始

国立がん研究センター・日本対がん協会・鹿児島県支部など

日本対がん協会(垣添忠生会長)と鹿児島県民総合保健センター(日本対がん協会鹿児島県支部)は7月、国立がん研究センターを中心とする研究グループに加わり、血液検査で膵臓がんの早期発見をめざす臨床研究を鹿児島県枕崎市で始めました。膵臓がんは「難治がん」の代表的なもので、見つかったときには進行しているケースが過半を占めています。早期発見の方法がないのが大きな理由です。世界中で研究が続けられていますが、まだ「これ」という方法は開発されていません。今回の研究は世界的にも注目されています。

7月4日午前7時半、枕崎市の健康センターで、同市の特定健診とがん検診の受付が始まると、台風3号の影響による雨にもかかわらず、約20人の住民が廊下に列を作った。

「血液検査で膵臓がんを早く見つける研究にご協力ください」。鹿児島県民総合保健センターの稲村和敏集団検診部長や横浜市立大学病院の加藤真吾助教(肝胆膵消化器病学)らが、同市の作ったチラシを掲げて説明する。興味をもった市民らが次々と「説明・同意コーナー」に並んだ。

この研究は、「血液バイオマーカー apoA2アイソフォーム(apoA2i)による膵臓がん検診の臨床研究実施に向けたフェージビリティ研究」(研究代表者＝本田一文・国立がん研究センター研究所早期診断バイオマーカー開発部門ユニット長)。日本医療研究開発機構(AMED)の研究費を受けて今年度から3年計画でスタートした。研究班には横浜市立大学、金沢大学、滋賀医科大学などの医師、研究者らが参加、日本対がん協会が研究事務局を務める。

apoA2iは血液中のたんぱく質で、

膵臓がんなど膵臓に何らかの病気があると、健康な場合よりも減少していることを本田ユニット長が発見し、検査キットを開発した。米国立がん研究所との共同研究で、膵臓がんの腫瘍マーカーである「CA19-9」よりも感度・特異度が高く、何より膵臓がんが早期の場合でもチェックできる特徴があることがわかった。今回の研究に入る前にホテルオークラ神戸クリニック(神戸市)や神戸大学などと研究し、膵臓がんの検査として有望なデータが得られた。

膵臓がん早期発見のマーカーになるか 検診の場で検証

今回の研究は、apoA2iの検査が膵臓がんの効率的・効果的な発見システムの構築につながるかどうかの第一段階との位置づけで、一般住民を対象とした健診・検診の場で検査を実施して早期膵臓がんの発見につながるか、膵臓がんのリスクとされる膵臓の病気の発見につながるか――を調べることを目的としている。枕崎市では7月に実施、8月には出水市でも始まる。

対象は50歳以上で、県民総合保健

では2年で協力を得たい考えだ。

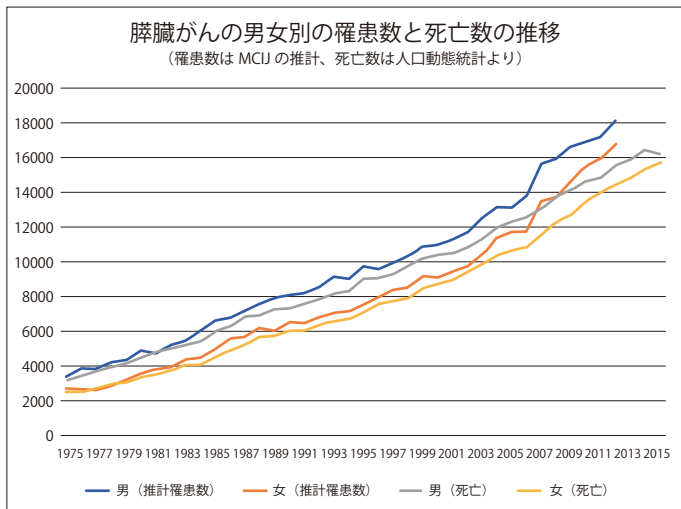
血液検査が「陽性」となった人は、鹿児島大学病院、鹿児島市立病院、出水総合医療センターのいずれかで必ず精密検査(原則としてダイナミックCT)を受けてもらう。血液検査と精密検査は研究費で賄い、住民の方々に負担は求めない。

鹿児島県が対象になったのは、県民総合保健センターが長年、腹部超音波検査を実施し、膵臓に異常が見つかった人が精密検査を受ける割合が9割を超えているなど、今回の研究を実施する基盤ができていると判断されたことに加えて、県民総合保健センターの働きかけで枕崎市、出水市の協力が得られたため。

今後はホテルオークラ神戸クリニックや神戸大学医学部附属病院も研究に参加し、人間ドックの受診者で50歳以上の人を対象に協力を求める予定。

膵臓で亡くなる人は年に約3万2千人(2015年、人口動態統計より)。がんによる死亡で4番目に多い。早期発見の方法がなく、見つかった時には進行しているケースが過半を占める。全国がん(成人病)センター協議会のホームページによると、膵臓がんの5年相対生存率は、ステージがⅠ期で41.2%、Ⅱ期が18.3%、Ⅲ期6.1%、Ⅳ期1.4%。手術症例ではそれぞれ47.8%、21.7%、13.3%、9.5%。Ⅲ期、Ⅳ期で見つかったケースが少しでもⅡ期やⅠ期で発見できるようになると、生存率の向上が図れる。また早期で見つかるケースが増えると、治療法の研究につながり治療成績も良くなると期待できる。(日本対がん協会マネージャー 膵臓がん検診研究グループ 小西宏)

センターの健診・検診を受ける両市の住民。文書による同意が得られた人に血液(7ml)を提供してもらい、apoA2iを測定する。計画では3年間で5千人から1万人を目標としているが、研究班



がん検診受診者拡大を考える研修会を開催

効果的な受診勧奨の事例を学び、生かす

日本対がん協会は7月14日、東京都千代田区の有楽町朝日スクエアで「がん検診受診者拡大を考える研修会」を開催し、全国26支部の職員39人が参加した。福吉淳・株式会社キャンサーズキャン社長による「ソーシャルマーケティングを活用した効果的なコール・リコール」と題し

た講演や、福岡県すこやか健康事業団（日本対がん協会福岡県支部）の取り組みについての事例報告のほか、「受診者拡大に向けて何ができるのか」をテーマに、参加者らが7グループにわかれディスカッションを行った。

受診率向上へ届きやすいメッセージでの案内を

キャンサーズキャンは、特定健診・がん検診の受診率向上に特化した民間のシンクタンク会社。全国約100の自治体と受診率向上の事業を進めており、福吉社長は全国各地でソーシャルマーケティングを活用した受診率向上についての講演をしている。

この日の研修会で福吉社長は、自治体との受診率向上の取り組みの成功事例をもとに、どうすれば受診率が上がるのかを解説した。

受診率向上について科学的根拠により「効果がある」とされたものとして、



講演する福吉社長



グループワーク形式で行われた研修会

手紙による受診勧奨・再勧奨（コール・リコール）を挙げ、「まずはその徹底を」と強調した。

コール・リコールをやっても効果がない、という自治体が出している受診勧奨の文書を見ると、文字数が多くて読みにくく、メッセージが届きにくい内容になっていることも指摘。

乳がん検診の案内で、受診者には自己負担額が1千円で受診できるメッセージを強調して文字数も減らした案内にすると、元の案内では1500人に送付して1人しか受診しなかったのが、1489人に送付したところ131人が受診するようになった効果を紹介した。人は興味のあることにしか目がいかないことに注意してメッセージを伝える重要性を示した。

さらに日々健康に気を使っている人や、病気になることを心配している人など、受診者の健康意識を過去の検診の間診票のデータなどを利用して把握し、それに応じてメッセージを変えた受診勧奨の仕方をする事で受診率が向上することも紹介。

検診の受付期間の終了後に3日間、追加の検診期間があることを通知して、「今行かなければ」と思わせることで、その3日間で検診受診者が大幅に増えた事例も示し、検診期間の拡大も受診率向上の秘訣であることを説明した。

さらに受診者の特性に応じた受診勧

奨には国の補助金が出ることから、そうしたことを自治体の担当者に伝えるなどして受診率向上に対する自治体の熱意を高めることもアドバイスした。

また、福岡県すこやか健康事業団の永末雄大企画運営係長は、2014年度から同事業団がキャンサーズキャンと業務提携して受診

勧奨の事業を始めたことを報告。14年度に始めた粕屋町では受診率が2.7ポイント上昇したとして、「自治体や検診機関だけで悩まず、その道のプロに相談すれば流れが変わる」と語った。

自己採取HPV検査使い受診勧奨

一方、日本対がん協会の小西宏・がん検診研究グループマネージャーは、子宮頸がん検診の未受診者への受診勧奨のツールとして、自分で検体を採取できる自己採取HPV検査を使い、この検査で陽性になった人に対し子宮頸がん検診の細胞診の受診を勧奨することを提唱した。運用のガイドラインを検討していることも示した。

研修会では最後に参加者らが「受診者拡大に何ができるのか」を議論した内容を報告。「事務的な受診勧奨になっていることを変えるために何ができるのかを自治体に伝えるのが大切」などの意見が出されていた。



熱心に意見が交わされた

特集 **がん教育****がん教育の本格始動について議論****神戸市での日本臨床腫瘍学会学術集会****日本癌学会、日本癌治療学会、日本対がん協会と合同シンポジウム**

文部科学省が今年度から小・中・高校でがん教育の全国展開を始めたことを受け、神戸市で7月末に開催された日本臨床腫瘍学会学術集会で、「学校における『がん教育』～本格始動の年における現状と課題」をテーマにしたシンポジウムが開かれた。日本臨床腫瘍学会、日本癌治療学会、日本癌学会、日本対がん協会の合同シンポジウム。文部科学省の北原加奈子・学校保健対策専門官や若尾文彦・国立がん研究センターがん対策情報センター長、本多昭彦・日本対がん協会がん教育担当マネジャー、林和彦・東京女子医大教授、相羽恵介・日本癌治療学会社会連携・PAL委員会委員長がシンポジストとなり、本格始動したがん教育の現状と課題について議論を交わした。



講演する若尾・国立がん研究センターがん対策情報センター長

ん教育における役割について発表した。

がん診療連携拠点病院の指定要件に「緩和ケアやがん教育をはじめとするがんに関する普及啓発に努めること」と示されていることを指摘。その

うえで、昨年10月に出された拠点病院の現況報告によると、2015年度にがん教育で医療従事者を派遣した拠点病院が約4割あったことを示した。

そのうちの約半数が年1回の派遣だったが、栃木県立がんセンターのように県の委託を受けて年に60回派遣していたところもあった。若尾センター長は、がん診療拠点病院が二次医療圏ごとに指定されており、地域への情報提供がミッションの一つとなっている特性を説明。外部講師の派遣について拠点病院が「がん教育の担い手の最も有力な候補である」と指摘した。

がん教育が全面実施となった場合、医療従事者の外部講師派遣を困難視する声も出ているが、若尾センター長は、拠点病院の数と学校数との単純計算で、1拠点病院あたり中学は25校、高校は13校あると推定。拠点病院の整備指針でがん教育の位置づけをもっと積極的にして、派遣について補助金が出る仕組みを整備するなどすれば実現可能な状況にあると訴えた。

また、本多昭彦・日本対がん協会がん教育担当マネジャーは、2011年度から協会が続けているがん教育の出張授業での講師派遣の協力の概要や、文部科学省が公表しているがん教育で教

えるべき9項目をクイズ形式で楽しく学べるアニメ教材「よくわかるがんの授業」など、提供している教材を紹介するなど、活動実績を報告した。その後、林和彦・東京女子医大教授が、これまで各地の小中高で実施してきたがん教育の出張授業の内容についてビデオで紹介、その効果などを説明した。

都道府県にがん教育の窓口を

最後に日本癌治療学会のがん教育担当委員会の委員長である相羽恵介・戸田中央総合病院腫瘍内科部長が、外部講師の担い手として全国に約1万6千人いる「がん治療認定医」を挙げた。がん治療全般がわかる総合医で、がん診療連携拠点病院にも在籍することから、がん教育への関与に期待を寄せた。

まとめのディスカッションでも外部講師をいかに確保するかについて議論になった。林東京女子医大教授は、「がんの専門医だけに外部講師を期待するのは苦しい」として、東京都ではがん教育の協議会を設置し、この中で学校医を外部講師として登録するシステム作りを検討していることを紹介した。「学校医が一番学校のことをわかっている」として、がんの専門医は学校医に対するがん教育の研修会などで協力することを提案した。

また、若尾センター長は「都道府県単位でがん教育の窓口を作ってもらうのが第一。そこから学会など様々ところがつながっていかないと進まない」と、がん教育にかかわる各機関のネットワークの構築を訴えた。

がん教育 2020年度以降全面实施へ

シンポジウムではまず文部科学省の北原専門官が、昨年末に改正されたがん対策基本法でがん教育が法律で位置付けられ、3月には2021年度から実施される中学の新学習指導要領でがんについて取り扱うことが示されたことなどを紹介。小学校では20年度から、中学は21年度から、高校では22年度から全面实施される方針も示した。それに向けて、この春に小、中高生向けの教育プログラムや自由に加工できるスライド教材を作製、公開していることも説明し、これらを活用することで順次全国の小中高で授業が展開されていく見込みを示した。

しかし、がん教育を効果的に実施するための外部講師の確保が困難であることや、教員のがんに関する知識が不十分である現状を指摘。今年度の事業として教員や外部講師の研修会の実施に取り組んでいくことを説明した。

**がん診療連携拠点病院
外部講師派遣の担い手への期待**

続いて若尾文彦・国立がん研究センターがん対策情報センター長は、全国に434あるがん診療連携拠点病院のが

「今、なぜ学校でがん教育が必要か」

林和彦・東京女子医大教授が講演

神奈川県立学校保健会横浜北部地区研修会



講演する林教授

神奈川県立学校保健会横浜北部地区支部研修会が7月11日、横浜市の神奈川県立白山高校で開かれ、「今、なぜ学校でがん教育が必要か」をテーマに林和彦・東京女子医科大学教授が講演した。研修会の開催には、日本対がん協会も協力し、養護教諭ら32人が参加した。

林教授は、がんの専門医としてがん患者や家族とかかわってきたなかで、数年前から、がん教育の必要性を感じ、各地でがん教育の出張授業を続

げ、この春には教員免許も取得した。

講演では、がんになった有名人が亡くなるとマスコミ報道によって「がんは死ぬ」と思われがちなることにふれながら、「毎年がんになる人は100万人を超えているが、死亡するのは37万人で、治る人が圧倒的に多い。このことが国民には浸透していない」と指摘。そのためにがんの啓発が必要と、数年前からがんの啓発活動を続けるうちに「学校でのがん教育は究極の啓発」と思いついたことを紹介した。

「がんについて知ってもらいたいの、今がんにかかっていない人、がんになった人を支えていく世代。若い時からがんや命について考えてほしい」と、がん教育の必要性を語り、これまで小学校、中学校、高校で実施してき

たがん教育の授業の様子もビデオで紹介。その中で、授業を受けた小学生の「がんは必ず死ぬ病気ではないと知り、安心した」などの感想も示しながら、「こうした子は大人になっても会社でがん患者を差別することはないでしょう」と語った。

また、授業を受けた中学生が親に授業のことを話したことで、今まで一度もがん検診に行ったことがなかった父親が検診に行くようになった例も示し、がん教育の効果を説明した。

さらにはがん教育の授業を行った高校の生徒のアンケートで、授業前は「がんになると仕事や家事を続けるのが難しくなる」と65%が答えていたのが、授業後には28%になり、「難しくなるとは思わない」との回答が6%から39%に急増したことも紹介し、「この子どもたちが大人になったら社会が変わる」とも語った。

桐生市・みどり市学校保健会研修会

佐瀬一洋・順天堂大教授ががん教育の特別講演



講演する佐瀬教授

群馬県桐生市の桐生市市民文化会館で桐生市・みどり市学校保健会研修会が6月28日に開かれ、佐瀬一洋・順天堂大学大学院教授が「モデル授業から得られたがん教育への感謝と期待～医師として、患者として、子どもを持つ親として」と題して講演した。文部科学省が今年度からがん教育の全国展開

を始めたのを受け、がん教育の必要性や進め方について理解を深めるのが狙いで、教員や学校医、学校歯科医、学校薬剤師ら約130人が参加した。

佐瀬教授は、悪性骨軟部肉腫という希少がんを患いながらも多くの人に助けられ、乗り切ってきた経験を踏まえ、各地でがん教育を実践してきている。

講演会では、患者として、医師として、子どもを持つ親として少しでも社会の恩返しになればとの思いからがん教育に取り組むようになったことを紹介。初めてがん教育の授業に出向いた5年前は、医療機関と学校現場の相違点を理解しつつ共通点を見出すのに少し時間がかかったものの、現在は文部

科学省から教えるべき9項目が示されていることを説明。そのすべてを教えるようとは身構えるのではなく、それぞれのニーズに応じて授業をすることをアドバイスし、「保健体育の先生だけにまかせるのではなく、学校全体で取り組んでほしい」と強調した。

また、文部科学省が4月に新たな映像教材の提供を始めたことや、日本対がん協会でも各種の映像教材を提供していることを紹介し、こうした教材をうまく活用することを勧めた。

さらに「がんとの闘いは情報戦である」として、国立がん研究センターがん情報サービスなどの信頼できる公的機関が出している冊子などを利用して授業の準備を進めることを勧め、「正しい情報を区別できるようにすることを教えてほしい」と訴えた。

がん検診受診率 男性肺がんで50%越え、全体的に上昇傾向

2016年の国民生活基礎調査

厚生労働省は6月27日、2016年に実施した国民生活基礎調査の結果を発表した。過去1年間にがん検診を受けた人の割合を示すがん検診受診率が最も高かったのは男女ともに肺がん検診で、男性が51.0%、女性が41.7%だった。がん検診についての調査は3年に1回で、国が勧める5つのがん検診の受診率はいずれも前回よりは上昇傾向だったが、国が目標とする50%を

超えたのは男性の肺がん検診のみだった。

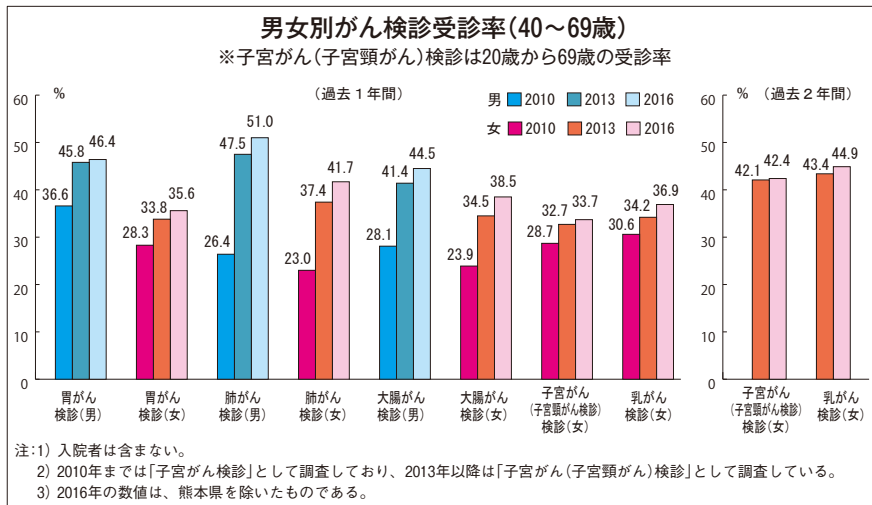
過去1年間に受けたがん検診の受診率と、前回(2013年)、前々回(2010年)の比較は下記のグラフの通り。

男性のがん検診受診率は肺がん51.0%で前回調査より3.5ポイント増加。次いで胃がん46.4%、大腸がん44.6%で、それぞれ0.6ポイント、3.1ポイント増えた。

女性のがん検診受診率は肺がん41.7%で前回調査より4.3ポイント増加、次いで大腸がん38.5%、胃がん35.6%で、それぞれ4.0ポイント、1.8ポイント増えた。

子宮頸がん検診と乳がん検診は国の指針で「2年に1回」とされているため、過去2年間の受診状況も尋ねている。その結果は、子宮頸がん検診の受診率は42.4%で前回より0.3ポイント、乳がん検診は44.9%で前回より1.5ポイント、それぞれ増えたものの微増にとどまった。

国民生活基礎調査は毎年実施されているが、がん検診の受診状況の調査は3年に1回で、全国の世帯から無作為抽出された約22万4200世帯分を集計した。アンケートの集計であるため、実態より過大な評価になりやすいとされるが、国のがん対策推進基本計画の評価指標に使われており、国の2016年度までのがん検診受診率の目標は50%となっている。



がんアドボケートセミナーを開催 最高の医療を引き出す患者力を議論



患者力について語る上野教授

適切ながん治療を受けるために必要な姿勢や、がん治療の継続に向けた支援活動(がんアドボケート活動)について学ぶ「がんアドボケートセミナー(ドリームキャッチャー養成講座)」が、7月2日、東京都新宿区の慶應義塾大学病院で開催された。

がん医療に対する夢を語り合い、共

有し、より良いがん医療にしようという「マイ・オンコロジー・ドリーム」活動の一環で、日本対がん協会のサバイバー・クラブ運営委員会とオンコロジー教育推進プロジェクトが共催。各地のがんサバイバーや患者家族、医療関係者ら47人が参加した。

セミナーでは、最初に米国テキサス大学MDアンダーソンがんセンターの上野直人教授が、がん医療に熱意を持ってかわる人材や、患者中心のがん医療を推進する人材を育成するマイ・オンコロジー・ドリームの使命やビジョンについて概説。がん医療のマイ・ドリームを考えようと訴えた。その後参加者が6グループに分かれて、「がんになっても困らない社会をつくる」「黒帯の患者になる」などと、自分たちのがん医療のマイ・ドリームを発表し

合った。

その後のセッションでは、参加者は「最高の医療を引き出すための患者力とは」をテーマに、2時間にわたってグループディスカッションを行った。

参加者らは自身のがん経験をもとに「患者力とは何か」などについて「自分の治療を自分で決める力」「病気や治療に対して情報を得る力」「医療者と良好な関係を築く力」などと意見をシートに書き出しながら議論。最後のまとめ発表では、各グループが患者力を上げる具体策を提示し合った。

「何より大事なのは正しい情報を得て、納得できる治療を受けること」として、わからないことをきちんと聞いたかどうかなどをチェックできる「患者力チェック表」作成など、すぐに活用できそうな提案がされていた。

2015年度グループ支部 がん検診の実施状況から ◆乳がん

■全体

支部名	受診者数 (A)	要精検者数 (B)	精検受診者数 (C)	精検の結果					精検不要の人数 (E)	がん発見率 (D/A)	陽性反 応の 中 度 (D/B)
				がん(D)	がん疑い	がん以外の疾患	異常なし	その他			
北海道	71,505	2,618	2,575	316	4	1,746	512	0	68,887	0.44%	12.07%
青森	26,869	1,645	1,500	59	0	488	643	310	25,224	0.22%	3.59%
岩手	36,460	771	741	114	0	444	183	0	35,689	0.31%	14.79%
宮城	53,271	1,683	1,592	125	0	927	540	0	51,588	0.23%	7.43%
秋田	15,634	1,104	901	30	2	397	276	196	14,530	0.19%	2.72%
山形	37,730	2,308	2,123	87	17	881	1,140	0	35,422	0.23%	3.77%
福島	21,429	492	446	42	7	180	187	29	20,937	0.20%	8.54%
茨城	56,413	2,133	1,987	136	2	1,119	730	0	54,280	0.24%	6.38%
栃木	48,631	2,856	2,566	106	27	1,455	965	0	45,775	0.22%	3.71%
群馬	26,466	1,017	990	76	9	545	360	0	25,449	0.29%	7.47%
埼玉	46,308	2,975	2,613	114	51	1,220	1,158	70	43,333	0.25%	3.83%
千葉	176,394	6,463	5,384	258	18	3,286	1,822	0	169,931	0.15%	3.99%
新潟	73,427	4,727	4,436	221	22	2,069	2,000	222	68,700	0.30%	4.68%
山梨	11,421	402	366	27	1	199	139	0	11,019	0.24%	6.72%
長野	38,441	2,266	1,869	66	0	800	798	205	36,175	0.17%	2.91%
富山	34,973	2,152	2,024	74	0	673	1,240	37	32,821	0.21%	3.44%
石川	23,595	1,635	1,506	72	3	421	743	267	21,960	0.31%	4.40%
福井	22,588	1,662	1,483	95	0	759	629	0	20,926	0.42%	5.72%
愛知	7,064	624	559	22	0	214	323	0	6,440	0.31%	3.53%
三重	32,486	1,480	1,367	76	4	733	548	6	31,006	0.23%	5.14%
滋賀	8,120	708	670	23	14	284	349	0	7,412	0.28%	3.25%
京都	38,939	2,570	1,781	0	0	0	0	0	36,369	0.00%	0.00%
兵庫	19,201	1,048	834	40	10	447	332	0	18,153	0.21%	3.82%
奈良	1,830	44	34	4	1	20	9	0	1,786	0.22%	9.09%
和歌山	10,746	611	578	30	0	174	272	0	10,135	0.28%	4.91%
鳥取	11,662	863	767	35	89	175	447	0	10,799	0.30%	4.06%
島根	10,103	455	423	30	3	220	155	15	9,648	0.30%	6.59%
岡山	21,583	1,018	685	26	0	22	291	346	20,565	0.12%	2.55%
広島	17,066	1,207	1,112	48	3	415	636	2	15,859	0.28%	3.98%
山口	7,433	872	549	17	0	156	288	88	6,561	0.23%	1.95%
徳島	8,721	382	342	40	1	195	106	0	8,339	0.46%	10.47%
香川	11,716	595	582	41	0	271	270	0	11,121	0.35%	6.89%
愛媛	29,537	537	512	96	4	264	148	0	29,000	0.33%	17.88%
高知	21,466	792	737	56	0	355	326	0	20,674	0.26%	7.07%
福岡	59,324	4,507	3,976	163	9	1,984	1,588	232	54,817	0.27%	3.62%
佐賀	16,162	925	848	37	13	286	371	141	15,237	0.23%	4.00%
長崎	18,784	1,079	1,026	52	8	541	425	0	17,705	0.28%	4.82%
熊本	30,479	1,281	1,088	68	0	623	397	0	29,198	0.22%	5.31%
大分	16,677	1,357	1,295	50	6	525	714	0	15,320	0.30%	3.68%
宮崎	6,402	457	422	16	5	194	148	59	5,945	0.25%	3.50%
鹿児島	49,173	2,411	2,316	96	45	1,223	952	0	46,762	0.20%	3.98%
沖縄	13,891	738	624	30	4	357	127	106	13,153	0.22%	4.07%
合計	1,290,120	65,470	58,229	3,114	382	27,287	23,287	2,331	1,224,650	0.24%	4.76%

第7回

「リリー・オンコロジー・オン・キャンパス〜がんと生きる、わたしの物語。」

絵画・写真・絵手紙コンテスト

最優秀賞に梅田美智子さん(絵画部門)、砂原涼志さん(写真部門)、塩田陽子さん(絵手紙部門)

7月10日、東京・中央区日本橋のコングレスクエア日本橋で「第7回リリー・オンコロジー・オン・キャンパス〜がんと生きる、わたしの物語。絵画・写真・絵手紙コンテスト」の授賞式が開かれた(主催：日本イーライリリー株式会社、後援：日本対がん協会、兵庫県、神戸市、大阪市)。

対象作品はがんにあっても自分らしく生きられる社会の実現を目指し、がんと告知されたときの不安やがんと共に生きていく決意、そしてがんの経験を通して変化した自分の生き方などをエッセイとともに絵画や写真で表現したもの。今回は絵画部門、写真部門、今年から新設された絵手紙部門あわせて95点の応募があり、各部門ごとに最優秀賞各1作品、優秀作品各1作品、インターネットによる一般投票賞1作品が選ばれ、7人の受賞者が表彰された。

絵画部門で最優秀賞となった「美しく生きる」を描いた梅田美智さんは夫が亡くなって「2人の娘と力を合わせて生きていこう」と決めた矢先に、自身に腫瘍が見つかった。死の恐怖、手術の苦しさ、抗がん剤の辛さなどを考えると、絶望の淵に立っているようで辛くなる時があるという。凜として美しい真っ白なクジャクや花々に「人はいつかこの世に別れを告げるのです。だとしたらこの鳥のように美しく生きていこう。凜として静かにそして



絵画部門最優秀賞作品



授賞式にて表彰を受けた受賞者たち

たくましく」との強い思いを込めて描いたという。

絵画部門の優秀賞・一般投票賞は蔵野由紀子さんの「One day」がダブル受賞した。

写真部門の最優秀賞は、砂原涼志さんの「その先に」。後ろ姿の女性は砂原さんの大切な人。砂原さんは19歳の時に健康診断で影が見えるといわれ、精密検査を受けたところ血液のがんだということがわかった。当時は「もう自分に未来はない、結婚もできない、死ぬのだろうか」と思ったという。その後、完治して職場の先輩と付き合いようになり病気のことを伝えると「関係ない」とプロポーズも受け入れてくれたという。「今後何があろうとも必死に生き、彼女を追いかけ一緒に歩いていきたいと思います。あの時頑張ったから今がある、この先の未来があるんだと思います」と強い決意と、前向きな思いを込めた作品だ。写真部門の優秀賞は森井邦生さんの「優しいまなざし」、一般投票賞は須賀研介さんの「母に見せたい景色」が受賞した。

今回から新設された絵手紙部門の最



写真部門最優秀賞作品

優秀賞は塩田陽子さんの「ウインクしている わたしのおっぱい」で、一般投票賞とのダブル受賞となった。塩田さんは4年前に乳がんの手術を受け、今でも胸をちゃんと見ることができないという。それでも塩田さんは「私のおっぱいはウインクしているんだと思うと

愛嬌があって愛しく思えてくる」「左のおっぱいは先に神様のもとへ行きました。あなたがいなくても私は生き抜いたよ」と、さまざまな体験を重ね、前向きな気持ちで自身と向き合っていることが、温かみのある色合いやさわやかな青空の下風にそよぐTシャツからも伝わってくる作品だ。絵手紙部門の優秀賞は津田恭子さんの「歩く」が受賞した。

これまでの受賞作品は各地の病院やイベント会場で巡回展覧され、既に100か所以上の病院で、多くのがん患者さんたちに勇気と希望を与えている。授賞式で挨拶に立った日本イーライリリーの執行役員でオンコロジー事業本部のアレクサンダー・ホーン本部長は「本コンテストが、がんにあっても自分らしく生きられる社会の実現の一助となり、同じ体験をされた方々に勇気を与えてくれることを願っています。弊社は今後も革新的な抗がん剤の開発に取り組むとともに、患者さんや支援者の皆さんの心に寄り添い、継続的なサポートを提供してまいります」と今後に向けた決意を述べた。



絵手紙部門最優秀賞作品